

風景のつながり

小栗 章

私が韓国(朝鮮)という地域と人びとにひかれるようになったのは、少年 A との出会いがあったからである。彼との出会いから 30 年ほど経ったいま、そう考えるようになった。

東北の風景

東京の郊外で少年期を過ごした私にとって、高校時代の二年間を過ごした東北の地方都市——水田のなかを灌漑用水が流れ、遠くになだらかな北上高地の山なみがつらなる風景——は別世界にあるように思われた。単に都会と地方という違いではない。外部の者が入り込むことを阻む、はっきりと壁のようなものを感じさせる違いだった。私が、いくら入り込もうとしても入ることができない。東北の風景と人びとは、私にとってそのような存在だった。人びとの容姿はさほど変わらないが、仔細に見ると顔の形や着ている物の色合いなどが違うように見えた。彼らのことばは外国語のように響くことがあったし、語彙やイントネーションの違いに驚かされることもあった。私の東京弁が彼らのことばと違うので、笑われることもあった。そんな体験をかさねながら、私は東京をなつかしく思うと同時に、彼らにとって自分が「よそ者」であることを感じていた。あるいは、当時の私は東北の風景のなかに入りたくなかったのかもしれない。東京にいたときも、仲間はずれにされたときなどに、自分がまわりの人たちと違うことを感じたが、さほど意識することはなかった。だが、東北にいるあいだは、自分が「よそ者」であることを常に意識させられた。

少年 A

A は、東北地方の岩手県にある農村で生まれ育った。私は、15 歳のときに東京から岩手県の高校に転校し、そこで彼と出会った。同級生のふたりは、健康上の理由で約一年のあいだ体育の授業に参加できなかった。ほかの生徒がサッカーやラグビーに興じているのを見学しながら、私たちはいろいろな話しをした。夏は運動場の土手の草いきれを感じ、冬は木造の体育館の一角で手の甲をさすりながら時空をともにするうちに、ふたりの親密感は増していった。

A の家では、彼が中学に入ってから、一年の大半を出稼ぎで過ごす父親がたまに帰ってくると、母親とのあいだに口論が絶えなくなった。それまで喧嘩などしたことのない両親の関係の変化にとまどった彼は、しだいに家で過ごすのを嫌うようになる。A と家との距離感は、彼が高校に入るところになると、かなり開いていたから、いつか東京に出たいと考えていたようだ。だから、東京から来た私に親近感をもったのだろう。だが、彼が私に近づいたほどには、私は彼に近づこうとしなかった。いま、そのことが悔やまれる。そんな私は、18 歳の春に東京にもどってしばらくすると、A のことをほとんど忘れてしまった。

三年ぶりの都会生活に私は浮き足だっていたはずである。岩手にいるあいだ感じていた疎外感をうち消そうとしたが、東京に移ってしばらくすると、そこに入ることでできない自分を感じ